

2017年版 教員養成音楽科モデル・コア・カリキュラムの提案[†]

高橋 雅子*・木下 大輔**・兼重 直文**
齊藤 祐***・浅井 暁子****・神部 智*****
小島 千か*****・頃安 利秀*****・阪本 幹子*****
菅生 千穂*****・寺尾 正*****・山本 訓久*****
山口大学教育学部*・宇都宮大学教育学部**
三重大学教育学部***・鹿児島大学学術研究院法文教育学域****
金沢大学人間社会学域*****・茨城大学教育学部*****
山梨大学大学院教育学研究科*****・鳴門教育大学学校教育学部*****
宮崎大学教育学部*****・群馬大学教育学部*****
大阪教育大学教育学部*****・東京学芸大学教育学部*****

2017年版 教員養成音楽科モデル・コア・カリキュラムの提案[†]

高橋 雅子*・木下 大輔**・兼重 直文***
齊藤 祐****・浅井 暁子*****・神部 智*****
小島 千か*****・頃安 利秀*****・阪本 幹子*****
菅生 千穂*****・寺尾 正*****・山本 訓久*****
山口大学教育学部*・宇都宮大学教育学部**
三重大学教育学部***・鹿児島大学学術研究院法文教育学域****
金沢大学人間社会学域*****・茨城大学教育学部*****
山梨大学大学院教育学研究科*****・鳴門教育大学学校教育学部*****
宮崎大学教育学部*****・群馬大学教育学部*****
大阪教育大学教育学部*****・東京学芸大学教育学部*****

これは、日本教育大学協会全国音楽部門大学部会会員により構成された音楽科モデル・カリキュラム検討委員会委員による共同研究である。本論文は、2007年の「音楽科モデル・コア・カリキュラム」（日本教育大学協会モデル・コア・カリキュラム検討プロジェクト 2007）を検討した上で、2016年12月の答申（文部科学省中央教育審議会 2016）、2017年3月の新学習指導要領、教員免許法改正の方針等を踏まえ、2017年版「音楽科モデル・コア・カリキュラム（小・中学校）」を「音楽科教員養成コア・カリキュラム構造図」とともに提案する。提案の位置づけ・方向性の一つとして「教科専門（7科目）」「教科教育」という分野ごとの区分からの脱却を挙げ、教員として身に付けるべき資質・能力の中でも分野横断的で密接に関連し合う「基礎的知識・基本的技能」を礎に、更に、分野の相互関連によって生み出される学びなど、音楽科を総合的に捉える視点からカリキュラムの項目を検討していくことで項目の統一的把握を目指している。

キーワード：モデル・コア・カリキュラム、「教科専門」と「教科教育」の架橋、アクティブラーニング

1. 2007年版「音楽科モデル・コア・カリキュラム」の検討

ここでは、2007年作成の「音楽科モデル・コア・カリキュラム」について現職教員を対象としてアン

ケート調査・分析を行い、このカリキュラムの妥当性及び課題について明らかにしていく。

(1) 現職教員を対象としたアンケート調査分析

調査時期は2016年3月1日～4月2日、調査対象者は宇都宮大学、三重大学、山口大学、鹿児島大学を中心とした教育学部音楽科（音楽専攻）卒業生122名の現職教員である。内容は、2007年作成の「音楽科モデル・コア・カリキュラム」の項目に平成20年の学習指導要領及び「教職実践演習」に係る項目を加えた33項目の多肢選択、自由記述の方式である。

項目の因子分析及び自由記述のテキストマイニングの結果、次のことが明らかになった。

①分析結果

・第1因子：指導法の工夫、第2因子：授業技術、第3因子：教科書の理解と学習の組み立て、第4因子：基本的な知識（教材曲、音楽の仕組み、音

[†] Masako TAKAHASHI*, Daisuke KINOSHITA**, Naofumi KANESHIGE***, Hiroshi SAITO****, Akiko ASAI*****, Satoru KAMBE*****, Chika KOJIMA*****, Toshihide KOROYASU*****, Mikiko SAKAMOTO*****, Chiho SUGO*****, Tadashi TERAQ***** and Norihisa YAMAMOTO*****: Presentation of Model Core Curriculum on Department of Music
Keywords: Core Curriculum, Bridge over Music and Music Education, Active Learning
*Yamaguchi Univ., **Utsunomiya Univ., ***Mie Univ., ****Kagoshima Univ., *****Kanazawa Univ., *****Ibaraki Univ., *****Yamanashi Univ., *****Naruto Univ. of Education, *****Miyazaki Univ., *****Gunma Univ., *****Osaka Kyoiku Univ., *****Tokyo Gakugei Univ.

(連絡先: montagne@cc.utsunomiya-u.ac.jp 著者2)

楽的事象)、第5因子: 基本的な知識(伴奏付け、作編、教材開発、管弦打楽器)と命名した。

【表1 プロマックス回転のパターン行列】

	因子				
	1	2	3	4	5
Q1-32	.834	-.060	.006	-.203	.026
Q1-24	.790	.150	-.370	.291	-.086
Q1-30	.764	-.168	.055	-.011	.083
Q1-29	.743	.080	.127	-.062	-.114
Q1-23	.722	-.046	-.002	.099	.030
Q1-27	.539	.125	.313	-.051	-.075
Q1-26	.483	-.018	.247	.168	-.016
Q1-25	.463	-.243	-.026	.192	.455
Q1-22	.294	.006	.120	.171	.177
Q1-17	-.045	.889	-.002	.062	-.069
Q1-18	.084	.810	-.088	.015	-.090
Q1-16	-.242	.748	.258	-.107	.121
Q1-15	-.016	.644	-.055	-.024	.173
Q1-20	.017	.488	.057	.407	-.037
Q1-14	.297	.473	-.153	.211	.064
Q1-19	.123	.386	.110	-.035	.328
Q1-12	-.066	.031	.835	-.017	-.007
Q1-10	.101	-.143	.701	.148	.064
Q1-11	-.210	-.053	.693	.477	-.011
Q1-31	.304	.187	.496	-.108	-.166
Q1-28	.340	.146	.435	-.194	.002
Q1-9	.158	-.023	.374	.313	.017
Q1-21	-.018	.045	-.034	.834	-.054
Q1-8	.088	-.074	.214	.667	-.053
Q1-13	-.067	.033	.138	.424	.305
Q1-5	.038	-.017	-.011	-.103	.938
Q1-4	-.180	.192	-.115	.203	.651
Q1-6	.095	.325	.075	-.213	.602
Q1-7	-.080	.091	-.014	-.382	.427

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法
a. 7 回の反復で回転が収束しました。

- ・第1因子～第3因子と「教職実践演習」の確認指標(教科書の理解と学習の組み立て、授業技術、指導法の工夫)はほぼ一致したことから、項目に相関関係があると言える。
- ・第4・第5因子は「基本的な知識」の項目であるが、指導案に係る項目は1、2で収束していることからこれを確認指標「指導案作成の力」に入れるべきか、検討が必要である。

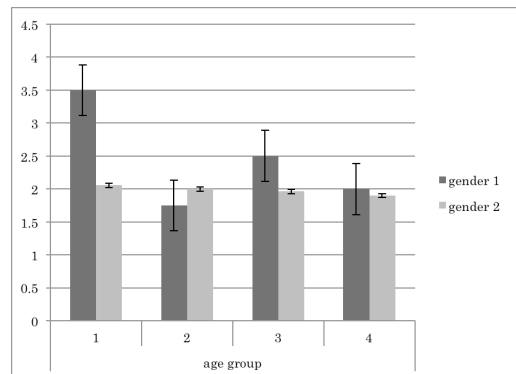
②考察

ここでは、項目の因子分析及び自由記述のテキストマイニングの結果について考察していく。

- ・指導案を作成する力(項目2)は、20代男性教員が他の年代と比べて必要性を感じていないことが明らかになった。(グラフ1参照) 自由記述のテキストマイニングによる結果から、20代教員は「演奏技能」を重視していることが背景にあると考えられる。
- ・形容詞句の使用の観点からは、20代教員が「簡単」「役立つ」、50代教員が「深い」など、年齢区分によって、重視する教育上の価値観が異なる

ことが推察される。

- ・校種による名詞の分析では、小学校教員は音楽の授業づくり、中学校では指導や教材、高等学校では音楽教員としての専門性と教員の職能のバランスを重視する記述がある。



1: 20代 2: 30代 3: 40代 4: 50代

【グラフ1 項目2の分析結果】

(2) 今後の課題と方向性

2007年版「音楽科モデル・コア・カリキュラム」の項目をもとにアンケート調査を実施・分析した結果、次の課題が明らかになった。

- ・ どのような教師を育てるべきか
- ・ メタ的な力量と実際の力量のいずれも持ちうる教員の指導力の検討
- ・ 「教科専門」と「教科教育」の統合
- ・ 能動的学修(アクティブラーニング)など、「何を扱うか」のみならず「いかにして学ぶか」に留意
- ・ 到達目標だけでなく、教員になってからの力量形成を含めた「学部段階の養成教育」の果たす役割の明確化(基本的な知識技能、教育活動として展開していく表現力、自らの課題を発見し対応する力、絶えず自己を高めようとする力)
- ・ 教員養成教育に係る政策動向の変化の見極め

以上の内容を踏まえて、2017年版「音楽科モデル・コア・カリキュラム(小・中学校)」及び「音楽科教員養成コア・カリキュラム構造図」を提案していく。

2. 音楽科モデル・コア・カリキュラムの提案

(1) 音楽科モデル・コア・カリキュラムの在り方

文部科学省は、国立教員養成大学・学部、大学院、

附属学校の改革に関する有識者会議資料「国立教員養成大学・学部におけるカリキュラムの在り方」(2017)において、次の方針を示している。

まず、「教員養成の質保障と高度化」であり、具体的な課題として「学習指導要領改訂への対応」と「教師の実際の業務の総体に対応できる力の育成」を挙げている。

次に、『「次世代の学校」(チーム学校等)を支えていける教員養成の在り方」であり、具体的な課題として「将来起こり得ることに対応できる力の養成」を挙げている。

「音楽科モデル・コア・カリキュラム」を提案するにあたって、この方針を踏まえて検討していく。

(2) モデル・コア・カリキュラムの「コア」とは

教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会(2016)において、「教職課程コアカリキュラム」は「教職課程で共通的に身に付けるべき最低限の学修内容」と定義されている。つまり、「コア(カリキュラム)」は「教員として共通的に身に付けるべき最低限必要な基礎的・基盤的(学修内容)」と捉えることが妥当であろう。したがって、各大学においては、コアカリキュラムの内容に加えて、その自主性や独自性、地域のニーズに対応した教育内容が求められている。各大学でカリキュラムやシラバスを作成するにあたって、本論文で提案する「音楽科モデル・コア・カリキュラム」を「コア」として検討した上で、有効に活用して欲しいと考える。

(3) 音楽科モデル・コア・カリキュラムの方向性

①「教科専門(7科目)」と「教科教育」の架橋

2007年作成の「音楽科モデル・コア・カリキュラム」は、教職実践演習の枠組みで全教科がカリキュラムを作成したため、各項目は分野ごとではなく融合された形で示されたことは評価できる。ただし、各分野の文言統一や項目数、内容について検討し直しが必要と判断した。「知識」「技能」は、区切りを破線にすることで主に教科に関する科目が横断的に関連して育む力量を示し、それぞれソルフュージュ、声楽、器楽、指揮法、音楽理論、作曲法、音楽史の項目順となっている。「教科専門」と「教科教育」の架橋は、構造図も参照されたい。

②音楽科モデル・コア・カリキュラムの枠組み

2017年版「音楽科モデル・コア・カリキュラム」は、「教職実践演習」の枠組み(「指導案作成の力」「教科書の理解と学習の組み立て」「授業技術」「指導法の工夫」)を検討した上で、音楽科としての技能と「授業技術」の棲み分けを明らかにするために、枠組みを「(7科目が横断的に関連する音楽の)知識・技能」「学習指導要領の理解」「音楽科の指導方法及び授業設計」とまとめ直した。後者2つの確認指標には、文部科学省教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会(2017)のコアカリキュラム案に示された項目を挿入した。

③教員免許法改正・新学習指導要領への対応

教員免許法改正によって、教科、教職、教科又は教職に関する科目の3区分が廃止され、「教科及び教科の指導法に関する科目」とまとめられたことから、「音楽科モデル・コア・カリキュラム」も枠組みを統一して示した。また、この科目においてアクティブラーニングの視点を導入するにあたって、枠組みに「学習形態・学習理論」を新設した。「学習形態」としては講義、演習の他、フィールドワーク、実地体験の工夫、グループディスカッション、ディベート、グループワークを示し、「学習理論」としては発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等を例示した。これは、実践・演習重視の授業にシフトすることを表しており、今後さらに具体的な検討が必要である。

3. 音楽科教員養成コア・カリキュラム構造図の提案

構造図を作成するにあたって、「教員養成・研修外国語(英語)コア・カリキュラム【ダイジェスト版】」を主に参照した。

本論文において提案した構造図は、「音楽科において児童・生徒の資質・能力を育成するための知識・技能、授業の組み立て及び指導・評価の指導力を身に付ける」には、どのようなコア・カリキュラムで教員養成を行うべきか、という全体の構造を示している。

まず、文部科学省教育課程部会(2016)「芸術ワーキンググループによる審議の取りまとめについて」を検討し、「音楽科において児童・生徒が身に付けるべき資質・能力」を明らかにした上で、構造図左側に示した。また、「音楽科モデル・コア・カリキュ

2017年版【音楽科モデル・コア・カリキュラム（小学校）】 ー 架橋領域を含む「教科及び教科の指導法に関する科目」の協働ー

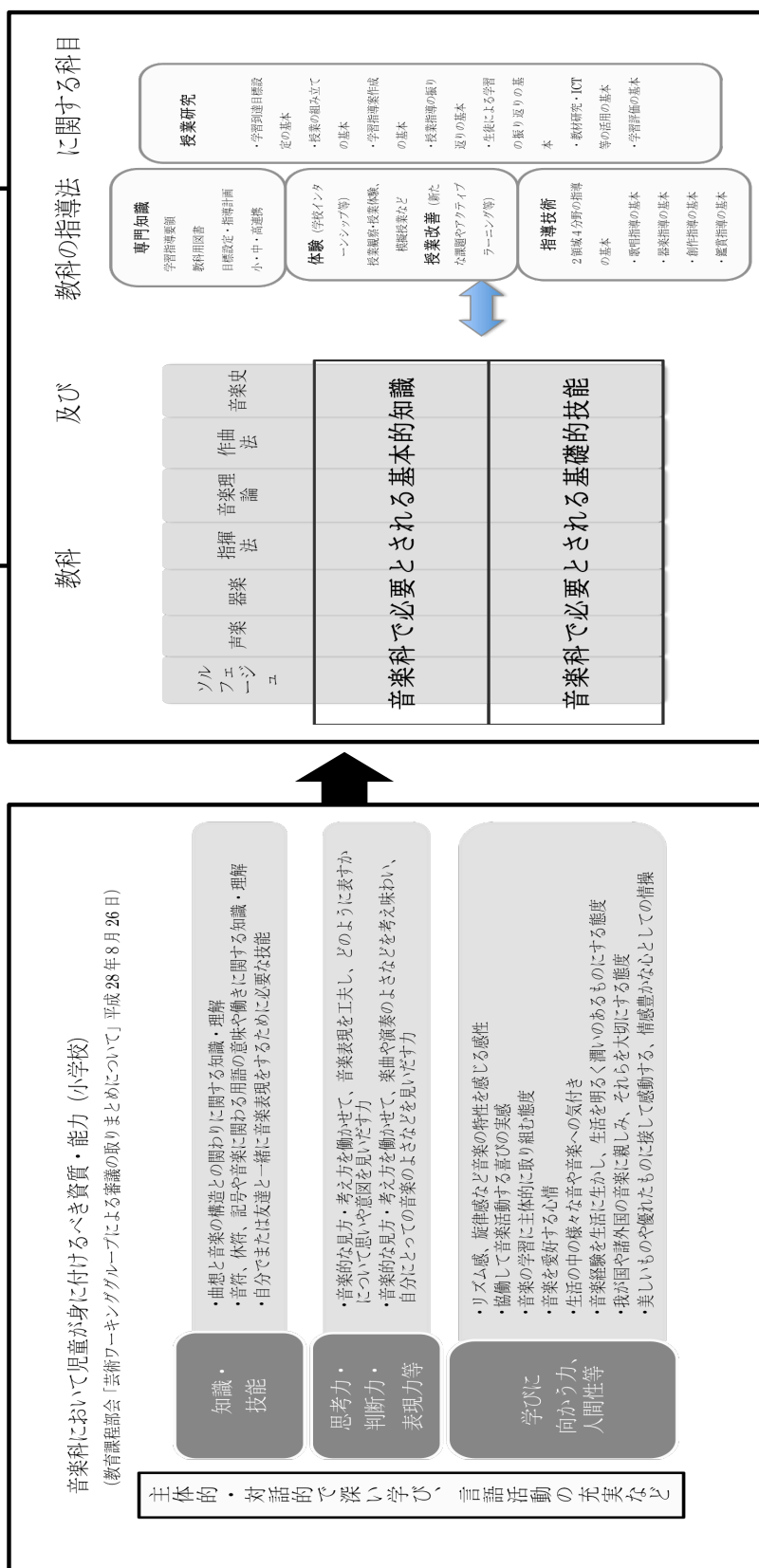
到達目標（教職実践演習）	確認指標	項目	学習形態・学習理論
教科書の内容を理解している など、学習指導の基本的事項 （教科書等の知識や技能など） を身に付けている。	音楽科で必要とされる基本的知識 を身に付けているか。	<p>読譜（ト音記号やヘ音記号、拍子記号、音符・休符など）に関する基本的な知識を身に付けている。 発声段階に応じた発声の知識を身に付けている（高学年は発声期を含む）。 自然で無理のない歌い方の知識を身に付けている（日本のわらべうたや民謡などのうたを含む）。 管・弦・打楽器・鍵盤楽器および和楽器に関する基本的な知識を持っている。 指揮に関する基本的な知識を持っている。 音楽の仕組み（構造的側面）について説明するための基礎的な知見を持っている。 音楽に関わる基本的な記号と用語を理解している。 和声の簡単な仕組み、楽式、声や楽器の特性など、作曲・編曲に関する基本的な知識を持っている。 我が国の伝統的な音楽文化および世界の諸民族の音楽に対する基本的な知見を持っている。 音楽史の概要をとらえながら、各種音楽を支える風土や文化・歴史との関わりを理解している。 音楽と他ジャンルの芸術との関わりを理解している。</p>	<p>「どのように学ぶか」 講義、 演習、 フィールドワーク、 実地体験等の工夫</p>
板書、話し方、表情など授業を 行う上での基本的な表現力を 身に付けている。	音楽科で必要とされる基礎的技術を 身に付けているか。	<p>リズム・音程など、音楽表現に必要な基礎的な能力を身に付けている。 記譜に関する基礎的な能力を身に付けている。 発声法の基礎を身に付け、表現力豊かに歌うことができる。 合唱指導の基礎的な技能を持っている。 打楽器、旋律楽器（リコーダーや鍵盤楽器、和楽器、電子楽器、諸外国に伝わる楽器など）の基礎的な技能を持っている。 合奏指導の基礎的な技能を持っている。 伴奏付けに関する基礎的な技能を持っている。 歌いながら伴奏をすることができる。 授業で機能する伴奏をすることができる。 曲調に応じた伴奏をすることができる。 指揮に関する基礎的な技能を身に付けている。 音楽を理論的に分析・考察する基礎的な技能を持っている。 音楽を理論的な分析・考察力を表現及び鑑賞の指導に生かすことができる。 作曲・編曲に関する基礎的な技能を持ち、簡易な作品を成すことができる。 作曲・編曲に関する知識・技能を、教材開発に生かすことができる。 音楽史の基本的な知識を理解した上で、それを自分の言葉で表現できる。 歴史的・文化的な考察力を、表現及び鑑賞の指導に生かすことができる。</p>	<p>グルーブデイスカッシ ョン、 ディベート、 グルーブワーク</p>
子どもの反応や学習の定着状 況に応じて、授業計画や学習形 態等を工夫することができる。	学習指導要領に示された音楽科の目 標及び内容を理解しているか。	<p>学習指導要領に示された音楽科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解している。 表現（歌唱、器楽、音楽づくり）及び鑑賞の学習内容について指導上の留意点を理解している。 音楽科の学習評価の考え方を理解している。 音楽科と背景となる学問領域との関係を理解し、教材研究に活用することができる。</p>	<p>発見学習、 問題解決学習、 体験学習、 調査学習等</p>
	基礎的な学習指導理論を理解し、具 体的な授業場面を想定した授業設計 を行う方法を身に付けているか。	<p>子供の認識、思考及び学力等の実態を視野に入れた授業設計の重要性を理解している。 音楽科の特性に応じた情報機器及び教材の効果的な活用方法を理解し、授業設計に活用することができる。 学習指導案の構造を理解し、具体的な授業を想定した授業設計を行い、学習指導案を作成することができる。 模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付けている。</p>	

2017年版【音楽科モデル・コア・カリキュラム（中学校）】 一架橋領域を含む「教科及び教科の指導法に関する科目」の協働一

到達目標（教職実践演習）	確認指標	項目	学習形態・学習理論
教科書の内容を理解している など、学習指導の基本的事項 （教科書等の知識や技能など） を身に付けている。	音楽科で必要とされる基本的知識 を身に付けているか。	読譜、記譜（ト音記号やヘ音記号、拍子記号、音符・休符など）に関する知識を身に付けている。 発達段階に応じた発声の知識を身に付けている（変声期を含む）。 曲種に応じた発声の知識を身に付けている（民謡や長唄などの伝統的な歌唱を含む）。 管・弦・打楽器・鍵盤楽器および和楽器に関する基本的な知識を持っている。 指揮に関する基本的な知識を持っている。 音楽の仕組み（構造的側面）について説明するための十分な知見を持っている。 さまざまな音楽的事象について説明の確信と用語を理解している。 和声法、楽式、声や楽器の特性など、作曲・編曲に関する基本的な知識を持っている。 我が国の伝統的な音楽文化および世界の諸民族の音楽に対する基本的な知見を持っている。 音楽史の概要をとらえながら、各種音楽を支える風土や文化・歴史との関わりを理解している。 音楽と他ジャンルの芸術との関わりを理解している。	「どのように学ぶか」 講義、 演習、 フールドワーク、 実地体験等の工夫
	音楽科で必要とされる基礎的技術を 身に付けているか。	リズム・音程など、音楽表現に必要な基礎的な能力を身に付けている。 記譜に関する基礎的な能力を身に付けている。 発声法に関する基礎を身に付け、表現力豊かに歌うことができる。 合唱指導の基礎的な技能を持っている。 我が国の伝統的な歌唱の基礎的な技能を持っている。 打楽器、旋律楽器（リコーダーや鍵盤楽器、和楽器、電子楽器、諸外国に伝わる楽器など）の基礎的な技能を持っている。 合奏指導の基礎的な技能を持っている。 伴奏付けに関する基本的な知識と技能を持っている。 歌いながら伴奏することができる。 必要に応じて移調して伴奏することができる。 生徒の音楽性を喚起するような伴奏をすることができる。 指揮に関する基礎的な技能を身に付けている。 音楽を理論的に分析・考察する力を持っている。 理論的な分析・考察力を表現及び鑑賞の指導に生かすことができる。 作曲・編曲に関する基礎的な技能を持ち、自己の作品を成すことができる。 作曲・編曲に関する知識・技能を、教材開発に生かすことができる。 音楽史の知識と理解の上で、自分の言葉で表現できる。 歴史的・文化的な考察力を、表現及び鑑賞の指導に生かすことができる。 学習指導要領に示された音楽科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解している。 表現（歌唱、器楽、創作）及び鑑賞の学習内容について指導上の留意点を理解している。 音楽科の学習評価の考え方を理解している。 音楽科と背景となる学習領域との関係を理解し、教材研究に活用することができる。 発展的な学習内容について探究し、学習指導に位置付ける方法を理解している。 子供の認識、思考及び学力等の実態を視野に入れた授業設計の重要性を理解している。 音楽科の特性に応じた情報機器及び教材の効果的な活用方法を理解し、授業設計に活用することができる。 学習指導案の構造を理解し、具体的な授業を想定した授業設計を行い、学習指導案を作成することができる。 模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付けている。 音楽科における実践研究の動向を知り、授業設計の向上に取り組むことができる。	グループディスカッション オンライン ディベート、 グループワーク 発見学習、 問題解決学習、 体験学習、 調査学習等
子どもの反応や学習の定着状況に応じて、授業計画や学習形態等を工夫することができる。	学習指導要領に示された音楽科の目標及び内容を理解しているか。		
	基礎的な学習指導理論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付けているか。		

音楽科（小学校）教員養成コア・カリキュラム（試案）構造図

音楽科において児童の資質・能力を育成するための知識・技能、授業の組み立て及び指導・評価の指導力を身に付ける。



音楽科（中学校）教員養成コア・カリキュラム（試案）構造図

音楽科において生徒の資質・能力を育成するための知識・技能、授業の組み立て及び指導・評価の指導力を身に付ける。

音楽科において生徒が身に付けるべき資質・能力（中学校）

（教育課程部会「芸術ワーキンググループ」による審議の取りまとめについて「平成28年8月26日」）

主体的・対話的で深い学び、言語活動の充実、など

知識・技能

- ・曲想と音楽の構造や背景との関わりに関する知識・理解
- ・音楽の多様性などの音楽文化に関する知識・理解
- ・音楽を形づくっている要素とその働きに関する知識・理解
- ・表したい音楽表現をするために必要な技能 など

思考力・判断力・表現力等

- ・音楽的な見方・考え方を働かせて、音楽表現を創意工夫し、どのように表すかについて思いや意図を生み出す力
- ・音楽的な見方・考え方を働かせて、音楽を自分なりに解釈したり自分や生活にととの音楽の価値を考えたりして、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる力 など

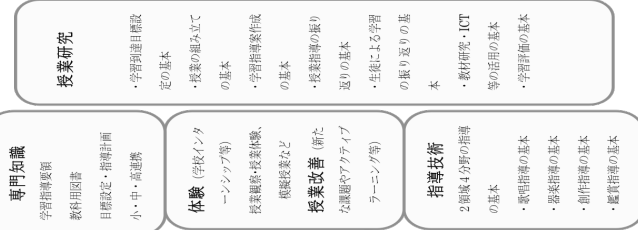
学びに向かう力、人間性等

- ・音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取る感性
- ・協働して音楽活動する喜びの自覚
- ・音楽の学習に主体的に取り組む態度
- ・音楽を愛好する心情
- ・音楽環境への関心
- ・音楽によって生活を明るく豊かなものにする態度
- ・我が国の音楽文化への愛着や、諸外国の様々な音楽に関わる態度
- ・美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心としての情操 など

生徒の資質・能力を高める指導力

教科 及び 教科の指導法 に関する科目

ソルフェージュ	声楽	器楽	指揮法	音楽理論	作曲法	音楽史
音楽科で必要とされる基本的知識						
音楽科で必要とされる基礎的技能						



ラム」で提案した具体的な項目については、構造図右側「児童・生徒の資質・能力を高める指導力」における「音楽科で必要とされる基本的知識・基礎的技能」に位置づけた。さらに、「教科専門」と「教科教育」の架橋、前提としての「児童・生徒が身に付けるべき資質・能力」との関係性を構造図に示した。

4. 小分科会による検討

以上の内容を踏まえた上で、日本教育大学協会全国音楽部門大学部会第42回全国大会（2017年5月13日、熊本市）において、声楽、鍵盤楽器、管弦打楽器・指揮、作曲、音楽史のグループに分かれて小分科会を行った。具体的には、音楽科モデル・コア・カリキュラムについて「各科目の項目が、コア（教員となる際に最低限必要な基礎的・基盤的な学修内容）となっているか」「各科目の項目について、小学校・中学校の関連が図られているか」の観点から、また構造図の構成等についても検討が行われた。なお、ソルフェージュの項目については、すべての小分科会で検討することとした。

多面的な検討と自由闊達な意見交換の結果、各小分科会から具体的な文言の加筆・修正や今後の課題が提案された。

今後も引き続き検討を要する課題は、以下の通りである。

- ・ 文言の不明確さ
- ・ 検討不足の項目
ポピュラー音楽、現代音楽、鑑賞領域、身体表現など
- ・ 小学校と中学校の関連、違い
- ・ 知識・技能の枠組の再検討（内容の重複に対して）と集約
- ・ 下位項目の必要性

下位項目を作成するかどうかについては、質疑応答の際に、音楽科モデル・カリキュラム検討委員会委員から「各大学の独自性を活かすために、『コア』の定義も含めて今後も検討が必要である」との回答があった。つまり、各大学の独自性を生かす観点から、コアの割合や拘束力という課題と併せて下位項目も検討する必要がある、ということである。

音楽科モデル・カリキュラム検討委員会は、約1年半かけて2017年版「音楽科モデル・コア・カリキュラム」の提案に取り組んできた。

これまで述べてきたように、2017年版「音楽科モデル・コア・カリキュラム」及び「構造図」は、今後も検討を重ねる必要があるだろう。しかし、各大学でカリキュラムやシラバスを作成するにあたって、本論文で提案した2017年版「音楽科モデル・コア・カリキュラム」を「コア」として検討した上で、有効に活用してこそそのモデル・コア・カリキュラムであることを忘れてはならないし、各大学の検討がこのモデル・コア・カリキュラムの改善に役立つことも大いに考えられるだろう。

本論文において提案した2017年版「音楽科モデル・コア・カリキュラム」が、「多様な社会経験等の幅広い知見を持つ教員の養成」「教科専門と教科教育の架橋領域への開発」「実践力に重点を置いたカリキュラムへの移行」という、求められる教員養成カリキュラムの方向性への「音楽科の試金石」となれば幸いである。

引用・参考文献

- 日本教育大学協会モデル・コア・カリキュラム研究プロジェクト（2007）「教員養成カリキュラムの到達目標・確認指標の検討—中学校教員養成における〈教科〉の在り方を中心に—」。この報告書のpp.13-16（音楽の到達目標と確認指標）を同協会全国音楽部門大学部会が作成した。
- 文部科学省 中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
- 文部科学省 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（2017）「第4回配布資料」
- 文部科学省 教育課程部会（2016）「芸術ワーキンググループによる審議の取りまとめについて」
- 文部科学省 国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議（2017）「第5回配布資料」

平成29年10月31日 受理

Presentation of Model Core Curriculum on Department of Music

Masako TAKAHASHI*, Daisuke KINOSHITA**, Naofumi KANESHIGE**,
Hiroshi SAITO***, Akiko ASAI****, Satoru KAMBE*****, Chika KOJIMA*****,
Toshihide KOROYASU*****, Mikiko SAKAMOTO*****, Chiho SUGO *****,
Tadashi TERAO***** and Norihisa YAMAMOTO*****

*Yamaguchi Univ., **Utsunomiya Univ., ***Mie Univ., ****Kagoshima Univ.,

*****Kanazawa Univ., *****Ibaraki Univ., *****Yamanashi Univ.,

*****Naruto Univ. of Education, *****Miyazaki Univ.,

*****Gunma Univ., *****Osaka Kyoiku Univ., *****Tokyo Gakugei Univ.